
Let ' s Go ! センソウ学園 !

鉄太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Let's Go! センソウ学園!

【Nコード】

N3245Z

【作者名】

鉄太郎

【あらすじ】

『戦場総合戦略傭兵団学園』、通称『センソウ学園』

その中で繰り広げられる主人公、「緋鏡 煉」とちよつと異常な仲間達の物語。

ジャンル的には『超戦闘系学園ラブコメディー?』

剣あり拳あり涙あり笑いあり魔法もあつたりしちゃうんだ。暇な時にでも是非見てください。

第一戦『Let's 開幕』（前書き）

結構前から書いていたんですが決心が付かなかったのになかなか投稿出来なかった作品です。

つたない文章ですが是非読んでみてください。

第一戦『Let's 開幕』

冬の寒さもすっかり明けて、起きるのがつらい春の日差しが降り注ぐ4月。

新入生たちはその桜の花吹雪を見て何を思うのだろうか・・・

さて、この物語の舞台となるのはとてもとても平和な・・・

『ただいまより、剣道部と生徒会による部費交渉戦争が行われます。エリアB～Cまでの避難を開始してください』

近代的なミサイルやらの大型の兵器がない異世界、それを己の武術、魔術その他諸々で補うための学園、『戦場総合戦略傭兵団学園』、通称センソウ学園というところだ。

・・・まったく平和そうに聞こえない？ 気のせいです。

「我等、剣道部一同はあ！！ 春季大会に向け、新入生成のため
に！ 尋常なる部費交渉戦争を申し込む！ 剣道部主将、守詩 結
城！」

精悍な顔立ちの少年が叫ぶ。

「部費は今期生徒会で正当に予算案が出され決められた物だ！ よ
つて、我々はこの学園の主義に則り、力によつて勝敗を決しようで
はないか！ この戦争、我等、生徒会が貴様らを倒す！ 生徒会会

長、深識 桜花！」

剣道部主将の口上に返すような形で赤みを帯びた髪を靡かせた目つき鋭い可憐な少女が声を上げた。

さて、ここで説明しておくのはこの学園のルールだ。

校則の中に1つ、基盤となる物がある。

『 弱 肉 強 食 』

果たしてこれを校則と言って良いのか・・・いや、その論議はまた別の所ですとしよう。

まあ、呼んで字の如く強者こそが全てとかのたまうものだからたまつたもんじゃない。

そしてこの戦争ルール。

お互いの意見が衝突したりするとどちらかが宣戦布告をし、相手が了承したら日時、及び戦闘許可区域の制限を決定する。

そしてさっきのように戦う前にお互いの大将が名乗りをあげるのだ。勝敗は大将を捕縛、敵陣地制圧、降参の三つに分かれている。

この戦争で負けたらどんな文句も言えないと言つまことにめんどくさい物である。

他にも決闘制度などの勝敗を決する方法は幾らでもあるがこれは放つておこう。

さて、この戦争の勝敗を握るのはズバリ、人員だ。

チームは決められた物ではなく、大将が集める事になっている。

外部からの助っ人や他の部活動と交渉をしたりして以下に有利に戦争を進めていくか・・・

これが戦争ルールの醍醐味だ。

つて事で説明終わり！

なぜ俺がこんな説明をしているかというと・・・

「何をしている緋鏡！ 早く行くぞ！ ワクワクするな！！！」

「・・・どうしてこうなった」

俺、緋鏡 煉に声をかけてくる見覚えのある女生徒。

深識 桜花、6年制の学園にも拘らず、3年生で圧倒的なカリスマにより生徒会長に上り詰めた超人である。

支持率120%、100パーセントを超えているのは生徒だけの投票だったのに教師陣も入れたからとか言われている。

勉強面、戦闘面でも並々ならぬ才覚で他の人間を引っ張りあげてい

く人だ。

ついでに俺は2年生、この人は先輩に当たるのだ。

「なにがだ、今から戦争だぞ？ そんなしけた顔じゃダメだ！」

「あなたが言いますか。それを……」

思えば、あの時からして間違っていたんだ。

そう、この人に会ってしまった。あの時から……

時は、4ヶ月前。

学校のイベント、『クリスマス聖戦』が開始される2週間ほどの事だった。

『クリスマス聖戦』とはクリスマスに男女ペアとなり、他の参加者をあらゆる力を持ってして、最後まで生き残った二人に食券300000円分が支給されると言う意味の解らない物だ。

ちなみに参加賞として単位を2貰えたりするので進級がやばい面子は必死になってペアを探していたりする。あと男女組という事で見え透いた下心を持った奴も居るんだが……

そんな大イベント控えていた時の事だった。

いつも通り登校していると……

そこで一際人混みが出来ている所があったのに気が付いた。

気が付いて……しまった……

1年生の時から有名人らしいその少女は翌日の聖戦の誘いを懸命にやさしく断っていた。

屍の山を築きつつ……

言葉を失った。ああ、失ったともさ。

だって笑いながら剣（もちろん刃は潰してある）を振り回して

『ごめん！ 私は君とは出られない』

『悪いね！ もう少し強くなきゃ私の相棒は務まらないよ！』

とか叫びつつ自分より大きな相手をさながら竜巻のように巻き込み、吹き飛ばしていく。

そう、この時その姿に見入ってしまったのが……

「む、お前も私とペアを組みたいのか？」

「……」

次の標的を見つけたようだ。その人も運が無いなーと思いつつ未だに立ち止まってみている俺。

「沈黙は是ととるぞ？」

あの人相手にだんまりか……勇気あるなあ……

「……あれ？」

そこで慌てて周りを見回す。

俺以外の人間は遠巻きに俺と少女を囲む様にしてひそひそと話し合っている……

これが意味する事は彼女の前に言葉をかけるような人間は、俺以外に居ない事になる。

つまり今声をかけられているのは……

「……え、俺？」

「やあ！」

「うおお！？」

呆けていると目の前に剣の切っ先が迫っていた。
首だけを逸らすようにして剣を避ける。

「甘い！」

しかし、剣を瞬時に持ち替えて刃をこちらに向け首を狙い真横に尻ぐ。

「ちょ！ あぶなっ！」

慌ててしゃがむ様にその剣を避けて距離をとる……

この間、1秒と少し。

こちらとしてはこんな人に絡まれるのはたまったもんじゃないし、
なにより目立ってしまふ。
目立つのは嫌いなのに……
そしてなぜ貴女様はそんなにも目をキラキラさせているんでしょう
か……

「行くぞ！」

「来ないでくださいよ！」

「問答、無用っ！！！！」

さつきよりも早く、鋭い突き。距離をとっていたのにも拘らず一歩
で間合いを詰められた。

「なんでこんな不幸に巻き込まれなくてはならないんだ……」

今度は避けない、1歩前に踏み出す！

ほんの少しだけ軌道を逸らすように手の甲を刀の腹に添える。

そのまま腕を取り、背負い投げを……

「まだまだあ！」

……しようとしたら投げる直前で重心をずらされ逆に投げられた。

どうしよう、この人真正銘の化け物だ……

けどまあ、今の接触でいくつか解った。

彼女が使っている剣はレイピアを改造した物だ。

技の基本形は突き、そして通常のレイピアより厚めの刀身により、
先ほどの様に突きからの斬撃に入るようなスタイルが実現できてい

る。

そして背負い投げをしようとした時に体に当たった硬い感触。
メインの武器がレイピアだと言う事も含めてマン・ゴーシユあたり
を所持しているようだ。

「……………ふむ」

冷静に分析し、1つだけ気が付いたことがあった……

目立ちすぎた……………

どうしよう、姉ちゃんに怒られ……………いや下手したら殺される。

「……………そうだ、どうしようも何もここで戦っている事自体がおかしいんだ」

「これはどうだ?」

少女は自分の前に剣を地面に垂直に立てるようにして構える。

膨れ上がる殺気……………

めんどくさい事、極まりない。

ただ、もうやることは定まったのだ。遠慮する必要は無い。

「……………なんだ? 土下座か? 誤る必要は無いだろう。これは神聖な勝負なんだからな。それとも軽々しく頭を下げるような男なのか?」

両手を地面につけ、右膝もつける。

まあ、見ようによつては土下座に見えなくも無い。

「見込み違いか・・・軽い態度で頭を下げる奴は、好かんっ!!!」

体の全てのばねを使い、全ての体重と力、そして絶対的な速度を保った突きは当然の如く俺を狙っている。

俺はと言うと、折りたたんだ左膝を思いっきり伸ばし一気に速度を上げて走り出す。

俗に言うクラウチングスタートだった訳だ。

俺の行動に驚きを見せる少女。

そりゃそうだ。自分から刃に向かって全速力で走りこむ奴が一体どれほど居るのだろうか。

刃が近づく。

あと、30cm・・・
10cm・・・5cm・・・

1cm!!

そこでもう1歩自分から左前方へ踏み込む。

少し頬に掠るが気にする必要は無い、そのまま走り抜ける!!!

「なっ!? ま、待て!!」

「お達者で、もう会う事はないでしょ」

そう、なんせ俺は1年生。名前も殆ど知られていない。しかも部活にも入っていないしイベントにも積極的に参加している訳ではない。実習授業も目立たない物を、進級に影響しない程度で受け、さらにクラスでもテスト、実技共に平均点ジャストを毎回とっている。

こんなどこにでも居るような人間を全校生徒の20000人強から探し出せるはずが無い！

心の中で確信めいた物を自分で述べ、これまた心の中で高笑いしながら走り去って行く俺であった。

俺の勝ちだ！

「あ、あの・・・緋鏡くん？」

少し上機嫌で教室の席に突いた矢先の事だった。

「ん、何か？」

「えっと、ほっぺが・・・」

「ほっぺ？」

ああ、さっき掠った・・・
と、右頬に手を伸ばす。

又ルリとした感觸・・・

頬がすっぱりと斬れていた。

「ありがとう、教えてくれて、気が付かなかったよ。次の時間の先生に保健室に言ってくるかと伝えておいてくれるかな？」

「あ、はい・・・」

「・・・？ 顔が赤いな、風邪か？ 保健室、一緒に行くかい？」

「い、いいえ！ だ、大丈夫です！！」

「そうか。お大事に」

「は、はい・・・」

「・・・あれ？ 刃は潰してある筈だったんだけど、どう言う事だろうか？」

まあ、この後あの人は保健室に来るであろう事を予測してすぐに捕まり、しかも聖戦のパートナー登録を半ば無理やりさせられ、しかももしか聖戦で事件があったりとなし崩しの今に至るのであった。

そう、本当にあの時この人と出会っていなければこれまで（と言ってもまだ4ヶ月ほどだが）厄介ごとに巻き込まれる事もなかったし、

これからの事件にも、もちろん関与する余地は無かったのだろう。そして、全ての先にある、一番厄介な物に気づいてしまう事もなかったのだろう。

「どうしたんだ？ 行くぞ、緋鏡！」

「……この一件が終わったら絶対に旅に出てやる」

良く解らない決意をしつつ、始まるは『超戦闘系学園ラブコメディ
ー？』

剣あり拳あり涙あり笑いあり魔法もあつたりするかもよ？ ……
まあ、要するになんでもあり！ ただし主人公の安息以外は！

主人公緋鏡煉とちょっと異常な仲間達の面白おかしい物語の始まり
始まり。

さあ、ご堪能あれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3245z/>

Let 's Go! センソウ学園!

2011年12月11日07時56分発行